源平合戦と淡路国の武士

福家　清司

はじめに

治承４年（1180）４月、後白河上皇の皇子以仁王が、平氏追討の令旨を諸国の源氏等に向けて発し、木曽義仲、源頼朝が挙兵、世は源平争乱の時代を迎えることになった。

この源平争乱の時代を描いた軍記物として知られているのが『平家物語』(1)である。この『平家物語』巻第９「六箇度軍」(2)に、源氏に味方するために大船２艘で淡路から京都を目指した「淡路国の住人安摩の六郎忠景」が、途中、２度にわたって平氏の襲撃を受けながらも、なんとか京都へ上ったことが語られる。

この物語に注目し、『平家物語』では語られていない、「その後の安摩六郎忠景の動向」に関心を示したのが戸田芳実氏である。戸田氏はこの「安摩忠景」が淡路島南端の阿万荘（南あわじ市阿万・沼島ほか）の水軍領主阿万氏であることを論証するとともに、次のように物語の「その後」を語る。

> 物語では安摩六郎忠景は深日も追われて都に逃げ上がっているが、源氏に加わった後のことを知りうる史料は見かけない。かれら南淡の阿万水軍が、次に源氏のために働いたとすると、それは元暦２年（1185）２月、義経が讃岐屋島の平家を奇襲するため、摂津渡辺から風雨をつき長駆して阿波に渡海したときであろう。それはまさしく由良の瀬戸から沼島付近を航行する南淡海域の航路であった。味方にはせ参じた阿万水軍は、このとき海路の案内者の役をつとめたのではないだろうか(3)。

ここで戸田氏は、阿万水軍が摂津渡辺（大阪市中央区付近）から阿波に至る海路の案内役をつとめたことを示唆する。『平家物語』の中でも、この義経の「四国渡海」とそれに続く讃岐「屋島（香川県高松市）攻め」は、とりわけ潤色の目立つ段となっている。しかし、この義経の「四国渡海」は暴風による漂着ではなく、当初から平氏の有力家人阿波民部大夫成良（以下「阿波民部」と略称）の根拠地である阿波国（徳島県）を攪乱するために周到に計画して敢行されたとする見方が早くから島田泉山氏(4)によって指摘されている。海域を熟知した淡路の水軍勢力が、この「四国渡海」の案内役をつとめたとする戸田氏の指摘は、この島田氏の指摘とも整合的であり、注目される。

本報告は、源平合戦の中でも重要な画期となった義経の「四国渡海」に際して、阿万荘の阿万氏など、淡路国の在地武士が重要な役割を果たした可能性があるとする戸田氏の指摘を改めて真摯に受け止め、源平合戦当時の淡路国の政治状況等について再検討を加えようとするものである。

１．四国・淡路における反平氏の胎動

（１）阿波・讃岐在庁の反平氏連合軍と「下津井合戦」

平氏政権は主に西国に権力基盤を置いていた。特に日宋貿易の貿易船を安全に兵庫（神戸市）まで迎え入れるために、瀬戸内海を重視した。その瀬戸内海に面した四国は概ね平氏政権の強い支配下に置かれていたが、その中でいち早く平氏政権に叛旗を翻したのは、

伊予国（愛媛県）の豪族河野氏であった。伊予国では越智郡に置かれた国府（今治市）を境に主に東部が新居氏、西部が河野氏と分かれて、勢力を競っていた。新居氏が平氏と密接に関係を持ったことが河野氏が源氏に走った背景にあったと考えられている(5)。

同様な事情は阿波国でもみられた。阿波国では、兵庫経ヶ島修築や屋島の行宮造営などで知られる在庁身分で、有力な平氏家人であった阿波民部一族が勢力を持っていた。これに対して吉野川北岸に本拠地を持つ、やはり在庁身分の藤原師光は京都で官職を得る一方で、後白河上皇に接近し、次第に反平氏へと傾き、安元３年（1177）６月の鹿ヶ谷の陰謀事件に加担し、清盛によって斬首の憂き目に遭った(6)。

このように平氏政権下で政権を支えた主要地域である四国地域であったが、『平家物語』「六箇度軍」の冒頭に「平家福原へわたり給て後は、四国の兵したがい奉らず。中にも阿波讃岐の在庁ども、平家をそむいて源氏につかむとしける」(7)とみえ、平氏が治承 4 年（1180）６月に京都から福原（神戸市）に都を移した後においては、四国内、とりわけ阿波と讃岐の在庁身分の武士が反平氏として挙兵したことを記している。そしてこの阿波・讃岐の武士は連合軍として活動したとされ、源氏方への「土産」として、備前国下津井（岡山県倉敷市）に拠る平氏軍を「兵船十余艘」で襲撃するも、手痛い反撃に遭い、都目指して逃げ上る途次、淡路国福良の泊（南あわじ市福良）に着いたという。

（２）淡路・阿波・讃岐連合軍の結成と「淡路合戦」

「下津井合戦」では阿波・讃岐連合軍は「遠負にして引き退」いたため、大きな損害を蒙ることなく、福良まで至ったとみられる。この阿讃連合軍はもともと大将となる有力な武士が不在の寄せ集め軍であったためか、淡路国に源為義の末子という「賀茂（掃部）冠者義嗣」と「淡路冠者義久」の２人の源氏(8)がいることを知り、その２人を大将と仰ぎ、淡路国の源氏方の軍勢に加わったという。これにより淡路国の源氏を大将と仰ぐ淡路・阿波・讃岐の反平氏連合軍が形成されたことになる。

淡路国は前述したように平氏政権が重視した瀬戸内海航路を扼する位置を占めることから地政学上重要であったために、国守も平氏一族が独占していた。そのため平氏政権下の淡路国は平氏勢力が強大な国とみるのが一般的傾向であるが、そうした中で、2 人の源氏を大将とする反平氏勢力が淡路国内で挙兵したという記事は注目される。ただし、『尊卑分脈』(9)には為義の猶子として「淡路冠者」を称した人物がみえるものの、その名前は義久ではなく、為家であり、一致しない。また、為義の子息や孫に「義嗣」はみえず、『平家物語』の記述を裏付けることはできない。

このように『平家物語』が伝える淡路の２人の源氏については実在したかどうかは確証が得られないものの、この源氏２人のうちの「淡路冠者」については国名を冠していることから、在国司の家系と考えられるし、今一人の「賀茂冠者義嗣」については、他の写本に記される「掃部冠者義嗣」が正しいとすると、淡路国府（南あわじ市神代国衙付近）に近い「掃部保（庄）」（南あわじ市榎列掃守付近）を本貫にした可能性が高く、やはり有力在庁身分の者であった可能性が想定される。

「下津井合戦」後に福良に逃れてきた阿波・讃岐の反平氏の武士の多くが在庁身分とされている(10)ことを考えると、平氏政権末期には平氏政権の膝下で在庁身分を中心として政権に対する不満が蓄積していたことがうかがえる。

『平家物語』によると、こうして結成された淡路・阿波・讃岐の反平氏連合軍は淡路国内に城郭を構えて、追撃してきた平教経軍と合戦した結果、「賀茂冠者打死す。淡路冠者はいた手負て自害してんげり。能登殿防矢ゐける兵ども、百卅余人が頸切って、討手の交名しるいて、福原へまいらせらる。」(11)という。

この「淡路合戦」が事実であるとすると、この合戦は淡路国内で実際に戦われた比較的規模の大きな源平合戦であったとみられる。これまで実際に淡路で戦われた源平合戦については、戸田氏が紹介した「紀氏系図」の淡路守「紀忠家」の譜註「淡路国安方（万）庄下司仍住彼国平氏合戦之時海上合戦」(12)にみえる「平氏合戦」「海上合戦」のみである。阿万荘は福良に隣接するとともに、源氏方の大将 2 人が本拠地としたと考えられる国府周辺とも至近距離に位置する。このことから推定して、この「紀忠家」が戦った「平氏合戦」「海上合戦」こそ、『平家物語』が伝える「淡路合戦」であった可能性が高い。

このように考えると、「淡路合戦」は淡路国内で実際に戦われた唯一の源平合戦とみることができる。そしてこの合戦には多くの淡路国の在地武士が加わったと考えられるものの、史料でその実名が判明するのはわずかに阿万荘下司であった紀忠家のみである。

（3）「淡路合戦」後の淡路・阿波・讃岐連合軍

『平家物語』は「淡路合戦」での淡路・阿波・讃岐連合軍の大敗を伝えるものの、戦死を免れた武士たちのその後の動向については触れていない。しかし、「はじめに」で言及した戸田氏が注目する「安摩忠景」が登場する段は、この「淡路合戦」直後のこととして位置づけられる。この「安摩忠景」は名字が示すように、「阿万氏」であり、前述の阿万荘下司紀忠家とともに、「淡路合戦」に加わった淡路国の在地武士の一人であったとみられる。その武士が淡路から京都を目指したという物語は、「淡路合戦」で生き残った源氏方の淡路・阿波・讃岐連合軍の武士達が京都に集結していた源氏軍の本隊に合流すべく行動したことを「安摩忠景」に仮託して描いたと考えて差し支えないであろう。

以上のように考えると、戸田氏が注目した「安摩忠景」の物語は、「淡路合戦」で敗れた淡路・阿波・讃岐連合軍のその後の動向を伝えるものと考えることができる。この動向の中で注目されるのが、最終的に和泉国吹飯（大阪府岬町深日）で合流した紀伊国の源氏方園辺兵衛忠康とともに、「身柄は逃げて京へ上る」(13)と記されている点である。このことから、「淡路合戦」後の淡路・阿波・讃岐の武士の中には、京都の源氏本隊に合流した武士がいたとみられるのである。

以上の「安摩忠景」の京都源氏軍合流の物語は、その後の義経が讃岐国屋島の平氏軍を背後から攻撃するために四国に渡海する物語を語る「逆櫓」(14)の重要な前提として語られている。次にその義経の「四国渡海」と「屋島攻め」について言及する。

2．源義経の「四国渡海」・「屋島攻め」と淡路・阿波・讃岐の武士

（1）義経の「四国渡海」と案内者

一ノ谷の合戦で敗北し、西海に逃れた平氏を討つために、元暦元年（1184）9 月に三河守源範頼は大軍を率いて一路山陽道を西に向かい、翌 2 年正月に検非違使左衛門少尉源義経は四国に渡るべく摂津渡辺に軍を動かした。

この後、義経は源平合戦上、大きな画期として『平家物語』などに物語性豊かに描写される「四国渡海」「屋島攻め」を行うことになる。この義経の「四国渡海」等は、まず渡辺から四国阿波に渡海した後、陸路阿波から讃岐に入り、屋島に拠る平氏を奇襲したとされる。その進軍ルートについては特に『平家物語』に詳しく描かれているが、物語性が色濃い段でもあり、その個々の内容を史実として受け取ることができるかどうかはそれぞれ慎重な吟味が必要となる。

上述のように義経の「四国渡海」は渡辺を起点とする点では異論はない。ただ『吾妻鏡』・『平家物語』などほぼすべてが2月16日の「丑剋」、すなわち午前2時頃の出発とする点については、果たして事実と考えて良いかどうかの検討は必要であろう。というのもこのような深夜に、しかも強風あるいは暴風(15)の中を船の航行が不可能であるとすると、まず出発時刻から疑わざるを得なくなるからである。

渡辺から出航して四国阿波を目指すとなると、一般的には大阪湾を沿岸沿いに南下し、友ヶ島水道から淡路の由良（洲本市由良町由良）沖に抜け、鳴門海峡に出るルートをとる。このルートをほぼ逆に、阿波国土佐泊（鳴門市鳴門町土佐泊浦）を夜中に出航し、「阿波の水門」を渡り、沼島を過ぎ、「田無川（多奈川）」（大阪府岬町）から和泉灘に至ったのが『土佐日記』(16)に描かれた紀貫之一行である。紀貫之一行がわざわざ夜間にこのルートを航行したのは「海賊は夜あるきせざるなり」と聞いたからであるが、このことは当時の当該海域の航海技術からすると、昼間の航海により海賊襲撃の危険を冒すよりも、夜間航海の方がより安全であったことを物語っている。すなわち紀貫之の時代、ほぼ10世紀前半頃には、この航路の船乗り達は夜間であっても安全に航行する技術をすでに確立していたとみることが可能である。

この『土佐日記』の例からも、夜間であっても、月明かりがあり、星がみえる天候であれば、この航路は航行可能であったと考えられることから、深夜、午前2時頃の出航については特に問題ないといえよう。

次に義経の上陸地点についてみておく。従来、義経の阿波国での上陸地点については『平家物語』などの「勝浦」が通説化している。しかし、『平家物語』には、暴風の中を吹き着けた阿波の地が「勝浦」と聞いて、義経が「是きゝ給へ、殿原。いくさしにむかふ義経が、かつ浦につく目出たさよ。」(17)と喜んだとされていることから、「勝浦」については潤色の可能性も考慮する必要がある。

この義経の阿波上陸について『吾妻鏡』は(18)つぎのように記載する。

【史料①】

延尉昨日自二渡海一之処、暴風俄起、舟船多破損、士卒船等一艘而不レ解レ纜、爰延尉云、朝敵追討使暫時逗留、可レ有二其恐一、不レ可レ顧二風波之難一云々、仍丑剋、先出二舟五艘一、卯剋着二阿波国椿浦一、〔常行程三ヶ日也〕、則率二百五十余騎一上陸、召二当国住人近藤七親家一為仕承一、発二向屋島一、於二路次桂浦一、攻二桜庭介良遠一〔散位成良弟〕、之処、良遠辞レ城逐電云々、

ここには上陸地点として「椿浦」がみえる。これを現在の阿南市椿泊町の椿泊と考え得る余地があるかどうかを検討すると、「椿泊」に上陸した後、直ちに陸路を進軍することができない地理的位置、地形であることや上記記事にみえる阿波国住人近藤親家との「出会い」の場としても不自然であることから、やはり「椿浦」は「勝浦」の誤写とみるのが

妥当と考える。

このように義経の上陸地点については、『吾妻鏡』もまた「勝浦」としていると考えられるが、一方で『参考源平盛衰記』(19)には「阿波国蜂間尼子の浦にぞ馳着ける」、『平家物語』長門本(20)にも「源九郎義経、既に阿波国八間尼子浦に着たる由聞え候」と、「勝浦」のように広域地名ではなく、比較的限定的な地名とみられる「蜂間尼子の浦」・「八間尼子浦」の地名も伝えられる。そして、この地名を手かがりとして、義経の上陸地点等について詳細に論及するのが「はじめに」で言及した島田氏の研究である。

島田氏の研究を結論のみ紹介しておくと、義経の上陸地点は現在の徳島市津田地区の東方（現在は海）に当時広がっていた「八万浦尼子津」(21)とする。そしてこの上陸地点は前述のように阿波民部の本拠地を攻撃するために計画的に選ばれたとする。ここで上陸地点が計画的に選ばれたとする点は島田氏の卓見と評価されるものの、その上陸地点の比定については疑義がある。というのは「はちま」は以西郡八万郷で、現在の徳島市八万地区を中心とする地域(22)、「あまこ」は勝浦郡の和名抄郷「余戸郷」を継承する地名であり、現在の勝浦川河口部南岸一帯に比定(23)されることから、「八間尼子（はちまあまこ）浦」は「八万余戸浦」が正しい表記とみられる。したがって「八万余戸浦」は八万郷と余戸郷の両方の地名を持つ複合地名といえる。このような複合地名は、両岸の地先に形成された中洲などを指す地名として使用されたと考えられることから、「八万余戸浦」の所在地は勝浦川河口部に形成された中洲であったとみられるのである。

以上のことから、義経一行は摂津渡辺から阿波国勝浦川河口付近に上陸したと考えられるが、『吾妻鏡』等では、この間の所要時間について、通常 3 日間要するところをわずか 6 時間ほどで航行したとする。しかしこれはいかに強風とみられる順風を受けての帆走であるとしても、あまりにも所要時間が短く、この時間については信じがたい。

次に、特に『平家物語』では、この「四国渡海」を義経一行が独力で敢行したかのように描写するが、夜間の出航であることや島田氏が指摘するように計画的な渡海であったとすると、この間の海域・航路を熟知し、さらに操船に長けた「船乗り達」が渡海を取り仕切ったことは疑う余地のないところであろう。

「はじめに」で言及したように、戸田氏は「安摩忠景」が京都で源氏に加わった後の活動として、「由良の瀬戸から沼島付近を航行する南淡海域の航路」の案内者の役を務めたことを指摘する。戸田氏が指摘するように、義経の「四国渡海」は、そのルートから考えると、淡路の水軍勢力が案内者を務めたとするのが最も合理的である。そして実際、「安摩忠景」などの淡路水軍が源氏軍に加わっていたことが戸田氏によって指摘されていることから、ますますその可能性が高いといえるであろう。

以上、義経が讃岐国屋島の平氏軍を攻撃するために、阿波国に上陸するまでのルートとその案内者についてみてきた。「四国渡海」を実現し、計画通り阿波に義経軍を送り届けた淡路水軍は、その後も屋島へ船を廻して、陸上から攻撃する義経軍と歩調を合わせ、平氏の軍勢と海上戦を繰り広げるなどの活動を行ったとみられる。

（2）義経の「屋島攻め」と案内者

義経は阿波に上陸すると、間髪を入れずに阿波民部の弟良遠を討つなどの軍事活動を展開した後、最短距離で阿波国を通り抜け、夜間に峠道に入るという行動をとっている。こ

のことからも阿波国内の地理や軍事状況等を熟知した案内者が不可欠である。そしてこの案内者として唯一実名で登場するのが「当国住人近藤七（六）親家」[24]である。

義経と近藤親家との出会いについては潤色に満ちているため、真実を見極めることは困難であるが、「近藤親家」は、鹿ヶ谷陰謀事件で平清盛によって処刑された藤原師光の子[25]であったとされている点と、義経上陸地点と考えられる勝浦川河口部に位置する津田島(徳島市津田地区)の本領主であり、在庁身分と推定される藤原親家と同一人物であったと考えられる点[26]が重要である。

というのも、前述のように阿波・讃岐の在庁が反平氏として挙兵し、「下津井合戦」「淡路合戦」を経て、その一部は京都の源氏本隊に合流したことが推定されたことから、ここに津田島領主藤原親家が加わっていたとすると、義経一行がその所領である津田島目指して渡航し、上陸地点から直ちに親家が義経一行の道案内を始めたとする一連の行程についても無理なく理解することができるからである。

従来、義経一行は暴風によって阿波国勝浦に漂着したとの説が根強いものの、すでに早い段階で島田氏は、義経の阿波上陸は「屋島の主将阿波民部成良の根拠を覆し、以て後巻の憂を断ち屋島に進むの計画であったに相違ない」[27]と指摘し、計画的な渡航、上陸であったことを指摘する。筆者も島田氏の指摘に加えて、義経一行は当初から勝浦川河口を目指して渡航し、最初から当地で津田島の領主親家の出迎えを受ける手筈であったとみる。

このように義経の「屋島攻め」は、「四国渡海」同様に、地元事情に精通した在地武士の情報を元に、周到に計画されたものであったと考えることができる。したがって、屋島までの行軍にも讃岐国の在地武士の案内があったと考えるのが自然であり、決して「近藤親家」一人が案内者であったとすることはできない。

以上のことから義経の「四国渡海」「屋島攻め」に関しては、義経の英雄譚としての物語とは別に、今後は、淡路・阿波・讃岐の在地武士による教導の力が極めて大きかったことを正当に評価する視点が不可欠となろう。

３．源平合戦の論功行賞と「国御家人」

（１）「四国渡海」「屋島攻め」の軍功と御家人

前述の通り、戸田氏は義経の「四国渡海」に際して、「安摩忠景」が海路の案内役をつとめた可能性を想定する。そして『尊卑分脈』「紀氏系図」に、「住彼国平氏合戦之時海上合戦」と注記されている紀忠家とともに、これらの軍功によって、「当然御家人の列に加えられたはずである」と指摘する。

この戸田氏の指摘は、淡路国の在地武士が源平合戦において、軍功を賞されて、幕府御家人に列したことを想定する点で注目される。しかし、その可能性は十分あり得るとしても、例えば「紀忠家」や「安摩忠景」が御家人なり地頭であったことを直接的に示す史料に恵まれない点が難点である。そこで戸田氏の想定を補強する事例として、次に「屋島攻め」において道案内をした「近藤親家」の場合を取り上げることにしたい。

この親家が在庁身分であり、津田島の領主藤原親家と同一人物とみられる点については前述したとおりであるが、本報告の趣旨からみてとりわけ重要な点は、その藤原親家が本領津田島の地頭として次の元久２年（1205）の「北条時政書状案」[28]にみえる点である。

【史料②】

貳箇条事

一　春日社領阿波国津田島事、

右件島者、先地頭兵衛尉親家之跡也、仍追彼例、被椎名五郎入道於地頭候了、然者無指其誤、忽難被改易候歟、但於有限御年貢者、不可致懈怠之由、被仰含地頭候了、（略）

以前両状、大略如此候、謹言、

五月十九日　　遠江守在判

春日神主殿　御返事

当史料の「先地頭兵衛尉親家」が別に「当(阿波)国住人前右兵衛少尉藤原親家」(29)、「当国南助任保并津田島者、同国住人藤原親家并粟田重政相伝私領也」(30)とみえる「前右兵衛少尉藤原親家」と同一人であることは、実名の一致及び官途の近似からみて、ほぼ確実であろう。とすると元久２年時点で、親家が義経の上陸地点である勝浦川河口部に位置する津田島の「先地頭」であったことになる。地頭であったということは、親家が幕府御家人として本領安堵の地頭に補任されていたことを意味する。

このように親家が阿波国住人でありながら、幕府御家人に列し、本領安堵の地頭職に補任されていたとすると、その理由が問われることになる。親家が義経の「屋島攻め」に仕承した「近藤親家」本人であることから、当然、その時の軍功によって御家人に列し、本領安堵の地頭に補任されたとみることができる。

この藤原親家と同様に、西国御家人でありながら、本領安堵の地頭職に補任された武士として伊予国忽那氏がいる。田中氏は「西国御家人の多くは幕府より直接安堵の御教書を下されることもなかったのであり、水軍としての忽那氏の地位を幕府が重視したことによるものであろうか。」(31)と、やや抽象的な理由をあげる。しかし、忽那氏の場合も、阿波の藤原親家と同様に、源平合戦、例えば長門壇ノ浦の合戦などにおいて、軍船を提供したり、実戦に自ら参戦したという具体的な軍功によって御家人に列し、本領安堵の地頭職補任の御教書を下されたとみるべきであろう。

このように考えると、義経の「四国渡海」「屋島攻め」以降の源平合戦に、源氏方として加わった西国の在地武士の中には、具体的な軍功を賞されて御家人に列し、地頭に任じられた者も少なからずいたと考えることができる。

以上、阿波国の国御家人藤原親家、伊予国の国御家人忽那氏を具体的な事例として掲げて、西国であっても具体的な軍功に基づいて本領安堵の地頭職に補任される場合があり得たことを指摘してきた。こうした事例を念頭に置くと、戸田氏が指摘する淡路国阿万氏についても源平合戦の軍功によって、国御家人に列し、本領阿万荘と福良荘の地頭職に補任されたと考えてもさほど不自然でないことになる。

（２）貞応２年「淡路国大田文」の「国御家人」と「地頭職」

すでに指摘したとおり、戸田氏は、阿万荘下司の一族阿万氏が源平合戦の功績によって御家人となり、本領安堵の地頭に補任されていたとし、貞応２年（1223）「淡路国大田文」(32)の阿万荘・福良荘に「国御家人」・「前地頭」と記載されている「以忠」がその子孫であろうとする。これまでみてきたところではこうした戸田氏の指摘は十分に納得できるこ

とから、報告者としてもこの「以忠」は承久の乱以前は阿万荘・福良荘の地頭であったと考える。ところがこのように考えることが許されるとすると、戸田氏が言及していない阿万氏以外の「国御家人」（表 1）の地頭職が問題となる。

表 1 「淡路国大田文」にみえる「国御家人」「前地頭」一覧

国御家人名	「前地頭」所領名	国御家人名	「前地頭」所領名
左馬允忠通	室津保	権守恒用	鮎原庄
四郎	物部庄	源次廻	枚石庄
刑部丞経実	炬口庄	兵衛尉以忠	阿万庄・福良庄
刑部丞範能	塩田庄	左近将監忠光	賀集庄
源三太郎義広	志筑庄	刑部丞光盛	津井伊賀利庄・掃守庄
太郎重助	生穂庄	藤三守長	鳥飼庄

従来、この「国御家人」については「前地頭」とみえていても、実際には幕府が任命した地頭ではなく、下司職などの荘園諸職であったとする見解が通説(33)とされている。その根拠は前掲の西国御家人に関する田中氏の指摘に拠ったものであり、明確な根拠はない。とすると、阿万氏以外の「国御家人」についても幕府から地頭に任じられていた可能性も考えられることから、次にこの点を検討したい。

『平家物語』は、「大船二艘に兵糧米・物具つうで」と「安摩六郎忠景」の戦力規模を表現する。「大船 2 艘」という海上戦力の規模を正確に推し量ることは難しいものの、この規模は「阿万忠景」単独の戦力であったとするには規模が大きく、やはり既述したように「淡路合戦」で生き残った淡路・阿波・讃岐の連合軍が打ちそろって、淡路を出航し、京都を目指したと考える。

このように理解すると、戸田氏が指摘する義経の「四国渡海」の水先案内についても、決して「阿万忠景」のみの功績と理解すべきではなく、「淡路合戦」に参加し、敗れて京都を目指した淡路国の在地武士全体の功績として理解すべきであると考える。

同様に、「屋島攻め」についても「近藤親家」1 人が案内したかのように記されるが、実際には讃岐国内の事情に通じた人物なしでは「屋島攻め」は実現できない。にもかかわらず、讃岐国の在地武士を登場させていないのは、そうした役割をすべて「近藤親家」に仮託したためであろう。「安摩忠景」に関しても全く同様のことが指摘でき、『平家物語』は数多くの淡路国の在地武士の代表者として「安摩忠景」の氏名のみをあげたに過ぎず、実際は「安摩忠景」と同様な行動をとった淡路国の在地武士がいたと考えるべきであろう。このように考えるならば、源平合戦の軍功によって国御家人に列し、地頭に任じられたのが阿万氏のみであったとすることは、実態からかけ離れた議論になる。実態は相当数の淡路国の在地武士が源氏方として「淡路合戦」を戦い、敗北した後も阿万氏とともに船団を組んで京都の源氏本隊へ加わるために淡路を出航したものであろう。そして淡路の水軍は本報告で取り上げた義経一行の渡海に限らず、義経一行に続く本隊の四国渡海などにも便宜を図るなど、多大な軍功をあげた可能性も想定される。「大田文」が示す「国御家人」「前地頭」は、そうした軍功の結果として、御家人に列し、本領安堵の形で地頭に補任されたことを雄弁に伝えるものとして再評価される必要があるのではなかろうか。

おわりに

以上述べてきたことを時系列で箇条書きにまとめると次のようになる。

①「下津井合戦」に敗れた阿波・讃岐反平氏連合軍が海路、福良まで敗走。

②阿讃連合軍と淡路の反平氏勢力は、「淡路冠者義嗣」「賀茂（掃部）冠者義久」を大将に擁立して、淡路国内で挙兵。

③平氏との合戦（淡路合戦）により大敗した淡阿讃連合軍の一部は上京し、義経率いる源氏本隊の傘下に入る。

④義経軍は淡路水軍の協力の下、讃岐屋島による平氏攻略のため、阿波国へ渡海。

⑤義経軍は阿波国の勝浦川河口に上陸。事前の打ち合わせ通り、津田島領主藤原親家と合流し、阿波民部大夫成良の本拠地を攪乱したのち、親家など在地武士の案内の下、陸路屋島を目指し、平氏軍を急襲した。

⑥この義経の「四国渡海」「屋島攻め」の軍功により、案内役をつとめた阿波国の藤原親家は本領津田島の地頭に補任された。同様に淡路水軍の一角を占めた阿万氏も本領阿万荘・福良荘の地頭に任じられたとみられる。

⑦貞応 2 年「淡路国大田文」には承久の乱以前に「国御家人」として地頭に任命されていた武士が阿万氏を含めて 12 名いる。これらの武士の多くは源平合戦で阿万氏同様に軍功が賞されて御家人に列し、本領安堵の地頭に任命された可能性が高い。

⑧義経の「四国渡海」「屋島攻め」は源平合戦の中でも節目となる重要な合戦。その合戦において、地理不案内でかつ海上合戦の経験のない源氏軍を勝利に導いた原動力が淡路水軍や阿讃の在地武士であったとみられる。

⑨以上のことから、源平合戦に果たした淡路国の在地勢力、とりわけ鳴門海峡・紀伊水道などで操船・航海技術を培った淡路の「海の民」の果たした歴史的役割はこれまで考えられてきた以上に大きかったと考えられる。

(1)ここでは日本古典文学大系 33『平家物語　下』岩波書店、1980 年に拠った。（以下、『平家』と略称）。

(2)『平家』188 頁。

(3)戸田芳実「中世南海の水軍領主—淡路国阿万庄と阿万氏」（田名網宏編『古代国家の支配と構造』東京堂出版、1986 年）。後、同『初期中世社会史の研究』東京大学出版会、1991 年再録、274 頁。

(4)島田泉山『徳島市郷土史論』泉山会出版部、1932 年。

(5)田中稔「鎌倉時代における伊予国の地頭御家人について」（竹内理三博士還暦記念会編『荘園制と武家社会』吉川弘文館、1969 年）。後、同『鎌倉幕府御家人制度の研究』吉川弘文館、1991 年再録、344 頁。

(6)日本古典文学大系 32『平家物語　上』岩波書店、1980 年、156 頁。

(7)『平家』186 頁。

(8)『平家』187 頁。「賀茂冠者」については「掃部冠者」とする写本がある。

(9)ここでは『新訂増補国史大系　尊卑分脈第三編』吉川弘文館、1980 年に拠った。

(10)田中稔「讃岐国の地頭御家人について」(寶月圭吾先生還暦記念会編『日本社会経済史研究　古代中世編』吉川弘文館、1967 年)。後、註(5)田中前掲書再録、308 頁。

(11)『平家』187 頁。
(12)註(3)戸田前掲書 273 頁。
(13)『平家』189 頁。
(14)『平家』巻第 11。
(15)「暴風雨」「風雨」とする論者（例えば戸田氏）もいるが、あくまでも「暴風」「強風」であり、雨は伴っていないため、ここでは夜間でも星空はみえたとして考察した。
(16)ここでは『日本文学大系第三巻』国民図書株式会社、1925 年に拠った。
(17)『平家』308 頁。
(18)新訂増補国史大系『吾妻鏡』文治元年（1185）2 月 18 日条（吉川弘文館、1972 年）。
(19)『参考源平盛衰記』自由閣発行、1886 年（国立国会図書館デジタルコレクションに拠る）。
(20)市島謙吉編集兼発行『平家物語』1906 年（同前）。
(21)島田説はこの「尼子浦」を康安元年（1361）6 月 18 日の大地震で海中に沈んだと『太平記』が伝える「阿波ノ雪ノ湊」に比定。したがって、島田説による義経上陸地点は現在は海中に沈んでいるとされる。
(22)『角川地名大辞典　36 徳島県』（角川書店、1986 年）「はちまん　八万」参照。
(23)同前、「あまるべのごう　余戸郷」参照。なお「余戸」の読みについては「あまこ」とみられる。
(24)【史料①】には「近藤七親家」とみえるが、『平家』308 頁には「近藤六親家」とある。
(25)佐野之憲編『阿波志』文化 12 年（笠井藍水訳『阿波誌』歴史図書社、1976 年）、「阿波郡　氏族　藤原親家」参照。
(26)拙稿「阿波国富田荘の成立と変遷」（『史窓』21 号、徳島地方史研究会、1990 年）。
(27)註(4)島田前掲書 153 頁。
(28)大和大東家文書（竹内理三編『鎌倉遺文』東京堂出版、1543 号）。以下、本書所収文書は『鎌』文書番号で示す。なお、本文書は年欠であるが、関連文書から元久 2 年のものであることが判明する。
(29)建仁 4 年（1204）2 月 17 日「官宣旨」春日神社文書（『鎌』1433 号）。
(30)承久 4 年（1222）3 月「大江泰兼愁状」春日神社文書（『鎌』2937 号）。
(31)註(5)田中前掲書 323 頁。
(32)皆川家文書（『鎌』3088 号）。
(33)石井進「『淡路国大田文』をめぐって」（『栃木県史しおり　史料編中世一』1973 年。後、『石井進著作集　第 2 巻　鎌倉幕府論』岩波書店、2004 年再録）。『兵庫県史』第 2 巻〈兵庫県、1975 年（該当部分高尾一彦氏執筆）〉。田中茂樹「淡路国大田文における承久没官地」（『阪大法学』55(1)、2005 年）など。

（追記）
報告者は本研究会では「淡路の荘園と地域の信仰」を担当し、淡路の荘園公領や守護支配と寺社について研究を進めたが、本報告では、紙幅が限られているため、特に「鳴門海峡」との関連性を重視した内容のみに限定した。なお、調査研究に際して、護国寺において貴重な古文書の閲覧・写真撮影をさせていただいたこと、南あわじ市教育委員会に貴重な資料のご提供をいただいたことを明記し、厚くお礼を申し上げたい。